

喜一郎邸

トヨタ自動車の創業者である豊田喜一郎（1894-1952）が、1933 年に名古屋の郊外に別邸として建てたものである。3 階建てのこの建物は、鈴木禎次（1870-1941）の設計によるもので、西洋と日本の建築様式が融合している。半地下の 1 階部分は漆喰で覆われ、カタルーニャの建築家アントニ・ガウディ（1852-1926）の作品を思わせるが、2 階の外観は当時の伝統的な日本家屋に似ており、3 階部分はドイツ風のハーフティンバー様式になっている。内部は、2 階がハードウッドフロアの洋風キッチン、リビング、ダイニングで、3 階が畳敷きの和室となっている。建物は年に一度、10 月にのみ一般公開されている。

大きな温室が特徴的で、豊田氏が花を好んだことがうかがえる。建てられた当初は、周囲にいくつかの温室があったため、「南山農園」と呼ばれていた。

初期のトヨタ車の会議をこの家で行っていた豊田は、1936 年に東京に移るまでは別荘として使用し、その後、息子が結婚して入居した。第二次世界大戦後、アメリカ軍は名古屋周辺の住宅を将校の宿舎として徴発した。しかし、米軍は畳などの日本的な要素を排除した洋風建築を好み、豊田家では 2 階のフローリングを畳で保護していたため、徴発を免れた。

この家は 1999 年に修復され、トヨタ鞍ヶ池記念館の横に移設された。その周りには、様々な種類の花が咲き、それぞれに意味がある。例えば、2011 年に植えられた桜の木は、相次いだ車のリコールからのトヨタの再出発を象徴している。